若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

2月20日
半月刊
第3号
購読料 1部 30円
半年分 600円
1年分1,200円(〒共)

叛旗
共産主義者同盟

発行人 川崎文人
編集人 仲代真理
発行所 東京都新宿区
百人町2—197
東京バレエ劇場ビル2F
大久保プロ気付
共産主義者同盟
「叛旗」編集委員会
TEL 03—363—5809
振替 東京 162856

2月22日 10・21裁判闘争
2月下旬 三里塚闘争
詳細連絡先 大久保プロ

「党—大衆」運動の現段階
八派—全共闘の止揚とは!

原則的党派闘争を貫徹し
党—軍—統一戦線を創出せよ

全国の同志諸君!叛旗購読者諸君!「党—大衆」運動、組織構造の止揚!を掲げて公然と新左翼戦線に登場した我々の党派闘争の現段階と全戦線で逢着している諸問題を明らかにしたい。論述を、第一に2・4、2・11を中軸とする対「戦旗」党派闘争の概括と評価、第二に2・4、2・11が要請、惹起した「八派—全共闘」止揚の内実鮮明化への我々の方向性、第三に70年12月連合「戦旗」派分裂についての我々の見解、第四に我々の組織諸路線における主張たる「党—軍—統一戦線」を構造的に創出するための具体的提起の順で進めていきたい。

2・4・「戦旗」粉砕の持つ意味

まず、全国の労働者、学生、農民、市民諸君に2・4「全軍労ゼネスト二周年記念、沖縄闘争勝利」集会において、戦旗派(理論戦線派)に壊滅的打撃を与え、2・11「建国記念日—靖国神社法案粉砕」闘争において官憲の我々への意図的な、執拗な介入にも拘らず対戦旗党派闘争を原則的に貫徹し対峙状況を堅持しぬいていることを報告しておきたい。日比谷公園で催された2・4集会に対して我々は以下の視点で関わった。69年2月4日、沖縄返還路線に沿った大量合理化に抗し上原などの目先の妥協にも拘らず英雄的に闘い抜いた全軍労に対して我々は何で連帯しうるのか?我々は2・4を「二周年記念」メモリアル集会に陥めることに断固として反対であった。

我々の見解は、2・4は政治路線からみれば、日米共同声明、屋良のヌエ的対応として支配層から一方B52撤去、毒ガス移送阻止から12・20コザ暴動に連なる暴力闘争への民衆の怨念の発露として現出した、「72年沖縄返還」路線の自民党党人派、社、共、中核、同伴知識層の色合いの差はあれ完全な破産宣告に対し、新たな方向性を日沖一体化路線粉砕、自衛隊移駐阻止、基地撤去の路線の下に3月沖縄返還協定粉砕へ具体化する事。運動内容からは、11月羽田闘争以降の「強制された自由」の範囲での「全共闘、反戦」カンパニア集会十合法デモ、その内実は対右翼、対民、対革マルの旧八派野合化の囲い込み路線が、何の生産

「実体」粉砕論者の有効性も、一方トロの砂川逃亡、ベ平連などの反軍産、反基地闘争のセレモニー化として課題と意識化の難易を問うに過ぎないことを示し、相互浸透もたれ合いを断つには、運動—組織の相互関連を、表現—存在の分化から煮つめる以外ないこと、その了解なしには、党派が新を集め大衆組織が細かい創意工夫をこらすことも、「新たな闘い方」へは結びつき得ぬこと。

組織路線から言えば、旧来の「昂揚—後退」論に見合った組織プログラム、党純化と統一戦線論の交番を、つまりはブルジョワ政治委員会の動向に一喜一憂するスケジュール闘争、組織観を投げ捨て、何故綱領域が階級形成論を喚ぶのか、経験の内化に基いて、階級の発現様式としての「党—軍—統二戦線」を構造的に創出するための全戦線からの各々への歩みへ「八派—全共闘」総体を解体させ、スタートラインに着くことの提起であった。

12・18連合戦旗派分裂以降、看板倒れの野合三派(関西、神奈川さらぎ派)、流れに浮かぶうたかたでしかない情況派は論外として理論戦線派=非武装革マル派は大義名分を採り、八派の枠組み内に在り、我々は八派の枠の外に「自由」に在る。上述の政治、運動、組織主張をもつ我々はその最も具体的な展開、2・4集会への大衆的登場と、実力的介入を、対「戦旗」派党派闘争として開始したのである。

日比谷野音入口での対「戦旗」第一次衝突は、いち早く登場した我々百名への八派(中核二百五十、解放二百、フロント九十、四トロ五十、M・L三十他)官僚の集会防衛をたてにとっての入場阻止通告と、我々の側からする「対戦旗闘争は会場内、外を問わず党派闘争としてありうる。会場内ゲバ防止の最良策は八派の対戦旗派索制が、ここそと裏口から野音に入った(八派がそれを容認した)時点で始まり、入口急坂において、上方からの戦旗と、下方からの我々の同数の圧力戦が続いた。八派を隠れミノにした戦旗の汚ない手口に対し、下方に位置した我々は明らかに戦術的に不利であった。

この時、「八派—全共闘」再編の我々の主張に耳を傾け、政治機関紙「叛旗」に目を通し、我々の一挙手、一投足を見守り、我々に声援を送っていた、ノンヘル全共闘部分、八派再編を揚げつつ中核路線に妥協している執行部非難を行なってきた解放派学生部分を中軸にして、全く自発的に約二百名が「叛旗ガンバレ、戦旗粉砕」の掛け声に共に我々の隊列を支え、スクラムを組み、ジリジリと上方へ進み始めたのである。集会防衛の名の下に行動隊を入口に移動させた中核派、八派固執部分—戦旗と我々—シンパ層、八派不満派の対時は、延々五分間続き、一時的に「党—大衆」運動、組織—構造をめぐる大きな流れの対立を現出せしめたのであった。だが、力量的に数等優れた我々も、不利な持場と、底面積が許容する容量の差を克服しえず、五分の後、一時後退を余儀なくされたのである。

第二次衝突は、八派の海にどっぷり浸った戦旗派のチンケなAIF代表発言中での我々の挑発で開始された。会場上方に位置し、地の利を得た我々は、今度はたやすく30秒で戦旗派をけちらしたのである。ここで、二度目のハプニングが現出した。八派官僚は、「集会破壊分子から集会を防衛せよ」とマイクで訴え、我々を革マル扱いせんとし、にも拘らず第一次衝突をはるかに上回る規模で、我々を見守り、行動的に支援する部隊が現出したのである。「理論戦線こそは八派内革マルである」という集会参加者共通の了解は、「行動せぬ中核」「社会党解放派」への内的批判と呼応し、「記念集会は、全軍労、コザ市民と連帯しうるか?八派吸い上げ路線への迎合ではないか」というヌルマ湯的状況への一筋の方向性を指し示したのであった。戦旗派は、我々に背を見せた後、追撃に退散し、しかる後に、事もあろうに演壇中央前部に、八派官僚に導かれて逃げ込み、中核派行動隊、四トロ、日大連合戦線等に防衛されて必死のおもいで、ようやく八派集会への残留を、恥も外聞もなく、八派の座を維持しえたのである。集会防衛の名の下に我々に武装対峙せんとした中核派、四トロ、連合戦線の諸君!我々に自発的に情報、武器提供、行同行動で協力してくれた解放派、フロント等活動家諸君、ノンセクト諸集団、各大全共闘諸君!事態の根底を視つめようではないか。

八派—全共闘の止揚と党派闘争の原則

「党—大衆」運動、組織—構造止揚とは何かを、主要に直面している党派闘争の性格と「八派—全共闘、反戦」との関りを軸に明らかにしておきたい。

……

2・22神奈川政治討論集会への招待
時・2月22日(月)PM6—9
場所・横浜文化体育館 平沼記念レストハウス会議室
交通・京浜東北線関内駅三分
参加者・大沢伸夫 神津陽他
全神奈川の地の革命的労働者学生市民諸君!地区運動の実践的な構築へ向け白熱の討論を開始しようではないか!
2・22集会実行委員会

学費闘争を媒介に
七〇年代権力闘争の烽火をあげよ（上）
南部地区反帝戦線明学大班

はじめに

全国の学友諸君、労働者諸君、そして「叛旗」読者諸君、青学大と共に都南部における旧社学同の拠点明治学院大支部は、戦旗派（さらぎ派）との分派闘争に勝利し、南部地区反帝戦線明学大班として甦ったことを宣言する。

六八、六九年明学闘争を領導し強固な支部建設をなしとげた旧社学同明学大支部は、その大衆運動主義故に対極たる党物神主義者集団戦旗理論戦線派（日向派）へ乗り移った鴨井グループ（鴨井は現在再びさらぎ派に乗り移っている）を生み出し、一時的には支部解体の危機を招来しつつも、彼らさらぎ派との分派闘争の過程で大衆運動主義を克服し、今再び強固な部隊結集でもって甦った。

かって社学同明学大支部から理戦派に乗り移っていった諸君（彼ら自身はそのように思っていず、我々の分派闘争の開始によってやっとBUNDではなくなるので……旗派―彼らにしてみたらBUNDに乗り移り、先頃の戦旗派の分裂において再び戦旗内多数派＝三派連合派（関西派、神奈川「左派」派、さらぎ派）に乗り移っていった。彼らは「第二次ブンド」の亡霊に取縋って生きている亡者にすぎない。鴨井よ、かって共に同志として闘った者から、最後の同志的忠告を与えよう。「初心に帰れ」と。君のチャチな乗り移り総括論文が理戦派に利用されている（『理論戦線』十号に鴨井来署名論文が陰謀的に掲載されている）のを見ると、共に同志と呼び合った者として義憤に耐え得ない）が「軍事、軍事」といいふらしていたその舌の根も乾かぬうちに、「自己批判するから後期試験を受けさせてくれ」と泣きついて来たのを見て、我々自身の支部建設がこんなにも駄目な部分をも含んでいたのかと、つくづく自己のいたらなさを確認せざるを得ない。こ……

後期試験は我々と、戦闘的学友諸君の果敢な闘いを恐れた学校当局のロックアウト攻撃によって三月中旬まで延期された。

全国の同志諸君、血の分派闘争に勝利し、南部地区反帝戦線明学大班は今再び全国の大学に先駆けて、学費値上げ阻止闘争を七〇年代階級闘争の質を切り開くべく開始した。

以下の論稿は、六九年十、十一月闘争敗北以降、全国の各学園、地区で苦闘する学友諸君に七〇年代学園闘争の方向性を提起するために印すものである。

この論稿は以下のごとく進められる。

二、学費値上げ阻止闘争を闘うにあたって
三、学費値上げの意味するもの
四、全共闘運動の総括
五、いかに闘うべきか

二、学費値上げ阻止闘争を闘うにあたって

（イ）われわれはどこにいるのか

十一月の敗北以降全共闘に結集した学生のエネルギーは霧散したかに見える。確かに全力を賭切った闘いの後には一種の空白が形成されるものだ。その合い間に佐藤政府は日米共同声明―総選挙の勝利と彼らなりの地歩を固めつつある。しかし彼らが政治―社会総体に渡って支配を貫徹したわけでは……の続発、公害問題、食管制問題、物価問題、入管法を媒介とした民族問題、中国代表権問題、何にもまして沖縄問題を見ても明らかなごとく、根本的には何一つ解決していないのだ。

しかし又われわれはブルジョアジーの難問を数え上げて、危機をアジる客観主義ではない。

われわれの闘いは、敗北の後の空白の中に闘いの主体を作り上げ……

三池―砂川―三里塚
三多摩地区反帝戦線

三里塚空港闘争の現局面の位置

三里塚空港建設がもつ現局面に於ける問題点は、沖縄とともに日帝の戦略の全水圧を表現している。

一つには、佐藤―三菱―防衛庁からJALをまで巻き込んだ軍事外交路線の一環として新空港を、一大兵站基地とする意図である。

先進資本主義国と第三世界の戦争と援助をめぐる関係は、60年代における、アメリカのドル危機と、ベトナムにおける反革命戦争の敗退、国内民族問題における動揺の中で、アジアの政治―経済的地図を塗り換えんとしている。

一方文革以降中国の国際軟化路線と華僑を中心とする東南アジアへの政治的経済的軍事的工作は今やとりわけ経済面において日本としのぎを削る結果をもたらしている。これらの利害が交錯するなかで日帝はアジア安保―日米・日韓華運命共同体の強化による反共軍事ブロックの建設に腐心している。

このことは、戦後世界構造の流動と再編を、沖縄をめぐる局現の整……

自然的共同性の崩壊
三里塚砂川反対同盟の基底

日本革命思想
戦後革命論の止揚と綱領創出のために
総論（一）
三上治

私達の逢着している最も困難な課題

指示向線の所有に向って

認識（観念）と行為（行動）の求離とその経験

党―軍―統一戦線を構造的に創出せよ